

根と茎と菌
根尾の共生ネットワーク

IAMAS Project
根尾コ・クリエーション
2019

Introduction

根尾コ・クリエイションは、岐阜県本巣市の中山間部に位置する根尾地区をフィールドとして2015年に始めたプロジェクトです。豊かな自然と古い歴史文化をもつ地域で、根尾の生活文化を新しいデザインやテクノロジー、あるいは異なる視点をもって捉え直し、クリエイティブな人たちの共創によって新しい表現を創造していくことを主な目的としています。

プロジェクトの4年目頃から私たちの関心は、新しい表現を創ることよりも、根尾の人たちが生存するために創ったシステムへと移っていきました。それは、古い神社や伝統芸能、村の人たちが造った水のシステムにまで及びます。私たちが注目したのは、伝統文化やエコロジカルな取組みではなく、人と環境というシステムの進化です。

プロジェクト最終年度となる2019年度は、根尾が歳月を積み重ねて作り上げてきたシステムが長い時間軸の中で、どのような関係プロセスを経てどのようなパターンで変容してきたのかについての問いとともにフィールドワークを行いました。調査から見えてきたシステムの進化をこの冊子にまとめています。小さな地域の柔軟で強靱な「精神」が皆様に伝われば幸いです。



Concept

スザンヌ・シマード（生態学者）、デヴィッド・ジョージ・ハスケル（生物学者）、ペーター・ヴォールレーベン（ドイツの森林管理人）らは、樹木同士が地面の下で根や菌類のネットワークを形成し、情報や栄養を交換し合い、時に弱った木があれば周囲の木が助けを出していることを明らかにした。三輪敬之（工学者）は、自然林の樹木が数十本からなるグループを横断的に形成し、そのメンバーの境界は時空間的に変化し多様性を維持しながらリゾーム的ネットワーク（哲学者ドゥルースらが提唱）を組んでいるという。そこに自他非分離的なコミュニケーションを基本として展開される生命社会があると考えている。

それぞれの集落が作った水の分配システム、集落ごとに存在する神社、外へと拡がる神事芸能や盆踊り、食や物の日常的な贈与関係など、私たちのフィールドワークから見てきたのはリゾーム的に繋がった一つのシステムだった。それは、古き良き日本の村社会の姿でもなく、現代社会が求めるコミュニティという平板的な表現でもなく、むしろ、森林の相互扶助コミュニティという私たちの生命文化にも迫る形に近いのではと感じさせる。

樹木の地表に出ている部分から地下にある根の存在を推測することができる、グレゴリー・ベイトソンは述べているが、樹木もそれぞれの部位で冗長性、意味、パターン、情報、予測可能性をうむコミュニケーションが行われており、そこからより大きなパターンの世界を捉えることができる。

本書では、根尾の人と環境というシステムを、樹木の「根」「茎」「菌」にイメージ付けて表現することで、一つの世界として理解することを試みる。

根

大事な養分や水を吸収する根。根尾では、昔から自分たちで川や谷から水を引いてきた。現在も集落で考案し築いた水分配の仕組みを自分たちで管理運営する。採れた野菜を交換しながら一緒に料理して食べたりする食のコミュニケーションは根に栄養分をもたらす役割を想起させる。

茎

根から吸収した水分や栄養素を植物の各所に運び成長を支える茎。集落の精神的支えである神社の存在と、そこで生活している人たちの物語や記憶が根尾を支える。

菌

ネットワークを通して独自の記号で他の木々とコミュニケーションする。集落の盆踊りや能狂言は今では根尾外の人たちと交流したり、根尾の伝統芸能継承を助けてもらったりする扶助をイメージさせる。

根 01 水源

命の糧を自ら守る

吉田 茂樹・小林 孝浩



水源調査

自分たちがよく調査に訪れる7地区について、地元の人たちへのヒアリングや現地のフィールドワークを通して、水源やパイプ、貯水槽の様子、維持管理方法や工夫などについて調べた。

長嶺地区



水が出っぱなし

きっかけは、根尾黒津地区の空き家の調査をしている時に、庭の片隅にあるコンクリート製の水槽のところで水が出っぱなしの黒いパイプを見たことだった。

凍結防止のために水を出しっぱなしにすることがあることは理解していたが、「人が住んでいないのに水道代は誰が払っているんだろう」とすごく気になった。黒いパイプの先をたどってみると、所々土に埋もれながら、庭から家の脇を周り、道路の下に消えていた。道路を渡ったところを探すと、さらにその先の林の中にパイプは続いていた。木の根を踏み越えながらたどっていくと、山の斜面の中腹にドラム缶のようなタンクを見つけた。元のパイプはそのタンクにはつながっていないようだったが、おそらく山の湧き水が谷川の水を引いているのだろう。

一方、タンクの方には別の黒いパイプから水が流れ込んでおり、タンクの下方のパイプがその地区の唯一の住民で

あるKさんの家につながっていた。Kさんに話を聞いたところ、谷川から水を引いており、飲用や風呂、庭の魚の飼育用の池など全ての用途に使っているとのこと。タンクに流れ込んでいるパイプの水が実際にどこから来ているか気にはなったが、その時はタイミングが悪く確認しなかった。

その後、他の地区で調査をした際、同様の黒いパイプがあるのを何度も見かけた。根尾には多数の集落があるが、それぞれの集落で山や川から水を引いているらしいことがわかった。旧根尾村は平成の大合併で本巢市の一部となり、その後、市が簡易水道を整備したが、いまだに自前の水道施設と並行して使っている。生活の重要な要素である「水」を自分たちで管理していることに興味がわき、プロジェクトの調査対象として水関係の設備や維持管理方法を調べることにした。



長嶺地区の貯水槽はコンクリート製で集落から少し上がった山の中腹にあり、隣に消毒殺菌用の設備が入った建物があった。管理をされている方の話では、消毒殺菌設備は故障してしまったため今は使っていないとのこと。水源は貯水槽の場所から山の尾根を回り込んで1.1km程行った先の谷川の上流にある。冬に雪でパイプが移動しないように、途中何箇所もアンカー留めされていた。パイプの経路の途中までは林道があるが、その先は谷川沿いの獣道を通っていくことになる。水源の場所にコンクリートで簡易ダムを設置して水を溜め、取水時にゴミが入らないように自分たちで穴を沢

山開けた塩ビパイプを取水口としている。

黒パイプの途中には空気抜きおよび汚水抜きの弁が数ヶ所あり、修理作業等で水源の水が汚れた時は、綺麗になるまで弁から水を出しっぱなしにする。それでも泥や砂などが入り込んでくるため、貯水槽で沈殿させてから集落に水を流している。

集落管理の水源やパイプの他に、貯水槽の近くの湧き水から個人が引いた細めのパイプも確認できた。そのような個人パイプを引いている住民は、市の簡易水道、集落の水道、個人で引いた水の3つを用途によって使い分けている。

門脇地区

門脇地区の水源は集落から1.4km程と距離はあるが、道の駅の脇の舗装道路を通って行けるためアクセスは容易である。水は谷川から取っていて、水源にはコンクリート製の二段の沈殿槽が設置されている。また、集落に近い所に貯水槽がある。ここには異物を除去するフィルターが設置されており、当番制で毎日清掃をしている。他にも当番が週に一度水源の状況を確認している。長嶺地区と同様に、集落のパイプの他に個人設置のパイプもある。

門脇地区では飲用以外に用水路が整備されてお

り、飲用の水源と同じ川の下流の砂防ダムの脇から取水されていた。この用水は田んぼや畑に使われているようであるが、集落内で水が流れ落ちる勢いを利用して芋の皮むき機を動かす動力にもなっていた。

用水路の取水口まで徒歩でたどってみたが、途中にかつては耕作されていたと思われる田んぼや畑の跡があり、用水路の途中から水を分けられるようになっているところが数ヵ所あった。この用水路のおかげで田んぼや畑を広げることができたのであろうと想像できた。



黒津地区



黒津地区で最初に見つけたタンクに流れ込んでいるパイプを追いかけて山の中をたどっていったところ、他にもパイプを数本見つけた。それらのパイプの多くは集落の少し北にある谷川の途中で敷設された取水口から水を取っていたが、最初にたどったパイプはその川をワイヤーで渡河してさらに北に延びていた。

そちらの取水口は急な山の斜面の途中から水が湧き出している所にあり、ゴミが入らないようにステンレス製の覆いが設置されていた。しかし、その上部は木があまりなく土砂が徐々に押し寄せているように見えた。実際

たびたび取水口が詰まるなどして水が出なくなることがあるとのこと。幸いにその経路以外に庭などに使う水のパイプが別途敷設されているため、修復するまでの代替はできるが、住民が高齢のため実際の修復作業は他の場所に住む知人に頼むことになり、修復まで時間がかかることもしばしばである。

タンクから取水口までの距離は700m程と、他の地区と比較しても必ずしも長いという訳ではないが、全ての経路が山の森の中の斜面を通っているため、徒歩でしか行けず到達するのに時間がかかる。

大井地区

大井地区は住居が50戸以上あって住民が多いためか、道路や川に沿ってパイプが複数引かれているのが確認できた。途中ワイヤーで吊り下げて川を渡しているところが何箇所もあった。集落から水源までは約2kmと距離はあるが、水源の近くまで川沿いに舗装道路が整備されていて車で行くことができる。水源は砂防ダムの下あたりと思われるが、パイプがダム下部に作られた穴の中に消えており、取水部分は確認できなかった。

戸数が多いためであろう、最上流の水源以外の場所で取水して別の細めのパイプで水を流しているものも確認できた。道路の途中の脇にコンクリート製の大きめの貯水槽があったが、用途については確認できなかった。また個人で敷設しているであろうパイプの途中にも金属製や樹脂製のタンクが設置されていたが、こちらはおそらくは水量の調節が目的と思われる。



水鳥地区

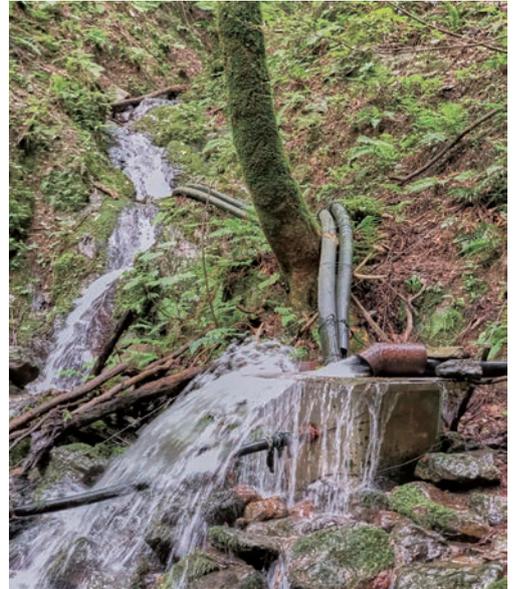
水鳥地区も50戸以上と人数が多いため、飲用等の水源とパイプが複数あった。また飲用等の水は水量がそれほど多くないため、田畑用に別途長い距離の用水路が敷設されていた。飲用等の水源は2箇所、泥などの沈殿の機能も兼ねた貯水槽も2つあり、ある程度の貯水ができるようになっているが、時期によっては水量が足りない時もあるとのこと。市による簡易水道もあるが、そちらを主に使う人は半数ほどである。水源の一つは集落から400m程で徒歩でもそれほど到達は困難ではないが、もう一つの水源は1.7km程あり、山の中腹に敷設された用水路脇の小道を通っていく必要があり、水源に行き着くには時間がかかる。

田畑用に敷設された用水路の水は、大量の水を供給できるように2.5km程先の水量豊かな川から取水されていた。取水場所にはコンクリート製のミニダムが建設され、大量の水が取り込めるようになっていた。途中には山からの湧き水が滝となって流れ込む箇所もあり、田畑用の水はしっかり確保できるようだ。用水路の取水口は集落からの距離はあるが舗装された広めの林道の脇にあるため、そこに至るのは容易である。しかし、途中の用水路は山の中腹の斜面に敷設されており、点検や修復の折には徒歩で行くしかないため確認や作業は時間がかかる。我々が用水路を調査した時も、当番の方が用水路の点検をしており、重要な施設であることがうかがえた。用水路は落ち葉や土砂崩れ等によって過去何度か埋もれたり破損したりしたようで、何箇所も蓋が設置されており、新しいU字溝や太い樹脂パイプなどで補修されていた。



能郷地区

能郷地区には30戸弱の家があるが、調査したのは能郷地区の中でも山に近い場所に住んでいる方が個人で敷設されたパイプと水源であった。水源から家までは900m程であるが、舗装路は200m程で残りは谷川沿いの道を徒歩での移動となる。水源は谷川の支流が合流するところにあり、貯水タンクが設置されていた。取水口には金属の網で手作りしたゴミフィルタを取り付けている。このゴミフィルタが大水で流されないように上からワイヤーで引っ張る形にしてあった。水量確保のため急斜面の支流の上部からも取水しており、パイプの途中には空気抜き弁も設置してある。これらは利用している方がすべて自分で設計し敷設したもので、平成10年頃で材料費が20万円程かかったとのこと。個人で敷設し一軒だけで利用しているため、維持管理もすべて一人で行っている。



越波地区

越波地区には定住している住民はいないが、越波出身の人が通いで集落に来て数日を過ごすという暮らしを営んでいる。越波では集落全体の水パイプはなく、個別にパイプを敷設している。そのうちの一つは、集落から少し山の方に登ったところに湧き水があり、そこから取水されている。ここは2、3軒が共同で利用しており、取水口のすぐ下に貯水タンクが設置されているが、今は通いの住民一人が面倒を見ている。それとは別に谷川沿いにも水パイプが敷設されていたが、こちらについては水源の確認はしていない。

越波地区の南のはずれには墓地があるが、その墓地用の水は住居用の水源とは別のところから取水されている。住居用のパイプが100m程の距離であるのに対して、墓地用のパイプは住居用より太めで水源まで800m程もある。それでもお墓という重要な場所のために水の維持管理をしているのである。幸いに墓地用のパイプは道路沿いに敷設されており、水源も道路から少し山を上っただけで行けるため、点検や修復などは比較的容易に行える。

飲用等の水

根尾は現在本巢市の一部であり、主要な集落は市による簡易水道が整備されている。また多くの集落では集落で水源の確保をしているほか、個別に敷設されたパイプを使って水を利用している家もある。長嶺地区のようにかつては殺菌消毒をしていたところもあったが、現在はその設備は利用できなくなっており、集落や個別設置のパイプから供給される水のほとんどは谷川や山の湧き水そのままである。そのため、飲用には簡易水道を主に使い、洗濯や風呂、庭の水やりや池の水などに山の水を使う家もあれば、山の水の方がおいしいという理由でほぼ



全てを山の水でまかなう家もある。また、庭の池で魚を飼ったり、噴水や水車を設置したりと、常に水が出ている家も何軒か見かけた。水の確保は生きていくために不可欠であると同時に、山から供給される豊富な水は集落の生活を豊かにしているのである。

用水路

近年の根尾では「根尾米」というブランドで米作りをしており、谷間の比較的平らな場所ではかなりの面積の田んぼが存在し、稲作が行われている。また、販売用あるいは自給用の野菜作りも盛んで、こういった農業には水の確保が重要になる。根尾は山間にあるため、近場の山の湧き水や谷川から水を引くことはできるであろうが、集落によっては、本格的な用水路を敷設して、川からより多くの水を確保しているところもあった。門脇地区の用水路脇でみかけたような休耕田もあったが、その用水路の水は集落内で芋の皮むきなどに使われたり、その先の田んぼに水を供給したりと、根尾の生活になくてはならないものになっている。

維持管理や工夫

行政によって維持管理されている簡易水道は、市の職員が維持管理する。一方、集落や個別設置の水パイプや用水路は、流木や落ち葉などによる詰まり、台風などによる倒木や土砂崩れ、雪による圧迫などによる破損は、自分たちで対処する。日常的にも取水口のゴミを取り除いたり、途中のパイプや用水路の様子を確認したりする必要もある。

このように自前の水システムの維持管理は、集落によってやり方が異なる。数年単位の当番制として担当者が面倒を見るところ、何か問題が起きたら有志が対応するところ、時間に余裕がある個人に管理を委託するところなど様々である。ただ、自分たちの重要な設備として自分たちのできるやり方で対応、維持管理をしているのはいずれの集落でも同じであった。

我々が長嶺地区で、集落の方の案内で水源を見に行った時、その少し前の台風によって土砂が大量に流れ込み、取水口あたりの川の流れが変わり、取水口の塩ビパイプが半分水の上に飛び出していたのを発見した。水中に残っている塩ビパイプの穴から水は取り込めていたようだが、川の流れを元に戻し、取水口も元の状態に戻す必要があると判断された。その日は作業できる道具は持っていなかったために、後日、集落の有志4人で復旧作業を行なったが、我々も手伝う中で、かなり大変な作業であることを実感した。

このような事は頻繁にあるわけではないが、日常の確認やちょっとした対処も含め、自分たちで面倒を見ていくの

だという意味が感じられた。

耐候パイプの恩恵

長嶺地区で水源およびパイプ等を敷設したのは平成元年頃。他の地区も多少の前後はあるがほぼ同時期のようなパイプについては破損等で部分的に交換したのものもあるが、敷設から30年近く使われ続けている。パイプは土に埋もれている場合もあるが、基本的には露出した状態にあり、紫外線や氷点下の気温、雪や土砂などによる圧力など悪条件に耐えてきた。調べたところ、使われている黒いパイプは耐候性を増すためにカーボンブラックを交ぜたポリエチレン管のようで、他に耐震性、耐衝撃性、耐寒性、耐熱性、耐腐食性に優れている。ポリエチレン管が製品化されたのは1953年(昭和28年)と比較的新しい素材である。

根尾では以前は水を流すのに竹などを使用していたこともあり、比較的近場の水源から水を得ていた。ポリエチレン管が登場し安価になっていったことで、初期費用はそれなりにかかるが、数100mや場合によっては1km以上の遠方の水源からでも水を引くことができ、よい水源の確保により安定して水を利用できるようになった。もちろん、その後の維持管理などは自分たちで行う必要があるが、新しい技術や製品が登場したことで生活の基盤を確固たるものにできたという見方もできる。

根尾の水システム

我々は、電気・ガス・水道といった重要なインフラを、それぞれの専門家に委ねている。今日、水道を自前で引こうという人はそういない。いや、普通は見つけれない。それが便利で、安全で、当たり前だからだ。しかし根尾では事情が違う。数々の調査で分かったように、どの集落でも当たり前のように、自前の水道を設置し、使用し、管理し続けている。集落で敷設したところがあれば、自分のできる人は個人で引く。現代の社会で、自治体が水道を敷設し管理するのが一般的であるのに対し、地域の結束に裏付けられた当番制という強固なシステムによって自前の水道が守り続けられている。調査を経て深く印象に残ったのは、台風後のメンテナンスであった。ひとたび災害によって断水すれば、普通は水道の回復を待ち望みながら、各戸の備蓄を消費し、給水車を待つのが一般的であろう。ところが根尾においては、これは常識ではない。近所に声を掛け、水源まで行ける人が自分たちで直しに行く。壊れたら直す。実に合理的で明快な行動である。水道が、自分たちの管理下、支配下にある。このような人による結束や仕組みが根尾の共生生活の根幹を支えている。

能郷に伝わる家庭料理のいい塩梅

平塚 弥生



能郷のスミさんの芋の塩煮

「この奥に住んどる、スミちゃんを作る塩煮が美味しいんやわ。2時間くらい水がカラッカラになるまで煮詰めるんやけど、全然煮崩れもしんしね、時間が経っても硬くならんしねえ、あんな風になかなか作れんわ。」 私たちは水源調査で訪れた能郷地区の葉名尻紀子（はなじりのりこ）さんのお宅の玄関先で休憩していたとき、芋の塩煮のことを知った。塩煮とは、じゃがいもの小芋を塩で煮るシンプルな料理だ。葉名尻さんに、実際にスミさんに塩煮を作ってもらおうよう頼んでいた。

紅葉が始まる11月中旬、能郷集落の一番奥に一人で暮らすスミさんのお宅にお邪魔した。

「まあ、ようこんな奥まで来なすった。なんでまた、塩煮なんかに興味あんの、たいしたもんやないんやよ」と大きな鍋に小芋をたくさん用意して待っていた。農機具を入れるような小屋には五徳がポンと置かれている。軽やかに薪を運び、コンクリートの上にそのまま並べ、薪の隙間に入れた乾燥したスギの葉に火を付ける。

大きな鍋に芋を入れ、山の水源から引いた水でザーッと洗う。手伝おうと手を出すのが、結構な重さがあった。「あー、えんよ。わたしやるで」と83歳のスミさんは、水も入れてさらに重くなった鍋を軽々持ち上げた。火がついた薪の上に鍋を置き、火を囲んでいろんな話をする。

「ここで一人で住んどったらね、なんでも一人でやらないかんのやよ、ほれこの小屋も全部自分で塗ったんや」と得意げに語る。

コータールで塗られた柱や壁、小屋の屋根も全て自分で塗ったという。わたしたちは火を囲み、芋が煮えるのを待った。

おもむろに塩を片手いっぱい掴み、3回ほど鍋に入れた。「塩はね、こんなもんやだいたいよ、毎回味は変わる、今日は辛かったなとか、足りなかったなってあるけど、まあそんでいいよ」と言う。スミさんは冬の間に3回ほど塩煮をするそうだ。雪が降り、農作業が出来ない冬は、小屋で火を炊いてゆっくり料理をする。「どうして家の台所ではなく、ここでやるのですか」とたずねると、「火焚いてたらあったかいやろ、焚いてたら誰かくる」と答えた。少し下ったところに住む葉名尻さんは、「スミちゃんのところから煙が上がるとね、スミちゃんなんか作っとるなって来るんよ。それで私もこうやって、よばれるわけ」と話す。たっぷりあった水がどんどん減って、スミさんが鍋つかみで鍋を持ち、豪快に鍋を振る。芋が舞い上がり、空中で転がり、お湯がザバツ、ザバツと溢れ出る。外での調理は、お湯が溢れても気にならない。スミさんは、恐らく無自覚にこの工程で塩分調整と煮詰める時間の調整をしている。そのあと、更に煮詰め、水分を飛ばし、芋に塩がコーティングされるようになるまで煮詰め、何度も鍋を振っていた。

スミさんは、熱々の塩煮を手に取り、皮のまま口に入れる。「うん、今日の塩煮は、あんばようできとる。さーあがって」と私たちにすすめた。塩で絡めた皮がパリッとし、ほっくりとした芋。材料は、じゃがいもと塩だけのシンプルな塩煮は、これまで食べたことのない味わいであった。

根尾の水源から引いた水は生活に密着し、野菜を洗い、料理にも使われている。これは、根尾で収穫された芋、水源からの水、みんなで火を囲んで語る楽しさも加味された特別な美味しさだろう。



材料

- ・男爵芋の小芋 ————— 鍋にいっぱい
- ・塩 ————— 手掴み
- ・根尾の水 ————— かぶるくらい

作り方

1. 芋を洗う

切らずにそのまま。



2. 煮る

かぶるくらいまで水を入れ、水から火にかける。



3. 塩を入れる

沸騰寸前に塩を入れ、ふきこぼれないように火加減を調整する。この時、混ぜることはしない。



4. 鍋返し

水分がなくなるまで煮詰め途中で鍋を返すように振る、完全に水分を飛ばし、焦げないように、何度か鍋を返す。



5. 出来上がり

芋に塩が絡み、白っぽくなったら食べ頃。



食べ方

皮付きのまま食べる。塩辛い場合は、皮を剥くことで食べながら塩分調整をする。塩で煮ただけのシンプルな料理のため、冷めた翌日はポテトサラダや、甘辛く煮詰めるなど他の料理に転用することが出来る。

葉名尻さんの大根の漬物

「大根漬けるけど、この前塩漬けしたから二週間後に本漬けにきんさい」 葉名尻さんから電話があり、二週間後に能郷の葉名尻さんのお宅にお邪魔した。

「まー、私が漬ける大根なんて、適当やで何の参考にもならないと思うけど」と言いながら、塩漬けした大根が入った大きな樽を見せる。

葉名尻さんの家の裏には畑があり、そこで収穫した大根を一週間ほど干し、葉の部分だけ切り落とし、塩で漬ける。「塩加減はね、一段大根敷き詰めて一掴み入れて、またその上に大根敷き詰めて、一段ごとに塩入れてくの、重石をしてね二週間くらいすると水が上がってくるの、そしたら本漬け」

お嫁にきて、お姑さんがやっていたのを見様見真似で覚え、近所や友達にいいと言われた方法を毎年取り入れると話す。「今年はね、友達がすすめてくれた大根漬けの素を買ってきた」といい大根漬けの素と塩と合わせる。「どんなんになるかな」と嬉しそう。軒下に重なった漬物樽を水源から引いた水で軽く洗い、塩漬けした大根を押し込むように隙間なく詰め、糠と大根漬けの素を合わせた塩、そして塩漬け大根と交互に敷き詰める。

葉名尻さんの手はかじかんで真っ赤になり、見るからに冷たそうだが、黙々と作業を繰り返す。全ての大根が樽に入ると、おもむろに畑に向い、枯れた大根の葉を持ってきた。「これ、この大根を漬けるときに上だけ切って干してたの。これを最後に入れてから蓋をするの。お婆さんがやっとな。これをするとカビが生えんのよ」と樽の淵に沿って、干した大根の葉を敷き詰め、蓋をして重石を乗せた。

ここから二週間後から食べられるようになり、一年かけて毎日の食卓に並び、近所にも配る。息子家族が帰省してきたときには、お土産に持たせるそう。帰りには大量に畑で野菜を収穫して、コンクリートの上に並べ洗う。

「こうやってね、息子たちにも持って帰ってもらうのが楽しみでね、若い人は喜ばんかもしれないけど。自己満足でね。野菜も作ってるの」と穏やかな優しい表情で語る。私も遠慮なく野菜をいただいて帰った。





私たちがお金を払って食を手にするには、必ず衛生管理と隣り合わせになっている。調理の前に手を洗う、異物が混入しないように粘着テープで埃を取り、アルコール消毒をする。アレルギー対策、異物混入対策など様々な衛生対策が細かく決められている。しかし、家庭料理では作る人、食べる人の信頼関係が築かれていること、自己責任であることで、販売する食品の管理とは大きな違いがある。

スーパーの店頭で並ぶ野菜は、袋に入れられ、箱やカゴに整列される。その野菜が店頭の床に直置きされていれば、違和感があるだろう。しかし、葉名尻さんが畑で収穫してばかりの野菜は地面に置かれていても何の違和感もない。この感覚の違いはなんだろうか。それは、今この場で収穫された野菜は生きたものとして、そして、スーパーに並べられた野菜は商品として、それぞれ認識しているのではないだろうか。流通による鮮度の違いもあるが、根尾で収穫された野菜を生きたまま調理をすることは、そこで育った空気と水と作られた環境と料理をする人の個性が大切な要素となっている。

スミさんの塩煮も葉名尻さんの大根の漬物も決して難しい調理方法ではない。材料も調理方法もシンプルだが、いざ同じ調理方法で実践してみるとなかなかうまくいかない。それは、葉名尻さんの漬物は、お姑さんから教わった知恵や製法、家の伝統を守りつつ、新しい手法を取り入れながら変えていく。スミさんは薪で炊き、長年の経験から微妙な火加減や湯をあえて溢す手法で塩加減を調整する。土地、山から引かれた水、家々の環境、そして脈々と伝わる知恵が根尾の家庭料理を進化させているのであろう。



葦 01 神社

根尾の神社について、ちゃんと知ろう

金山 智子

根尾には三十七の神社があります。
今の時代から、根尾の神社の歴史について読み解いていきます。

根尾の人たちの暮らし
根尾
あんばよう
しよまいか
第七回 「根尾の神社について、
ちゃんと知ろう」

川口 康夫 さん
所願手 さん

2019年10月26日(土)
13:30 - 16:30
場所：ジャッキーハウス
「ねおこ産」対岸、橋のすぐ脇の小さな赤い家
※駐車場は「ねおこ産」のものをご利用ください。

参加費・申し込み不要
ねおこ ハウス
主催：IAMAS 根尾コ・クリエイション

根尾にある37の神社では、春や秋になるとそれぞれの神社でおまつりがとり行われ、集落の人々が集まる。根尾最北の集落では居住者がいなくなっても神社はちゃんと手入れされている。そして今でも春や秋にはおまつりが行われ、元住民たちが集まってくる。人気のない集落もその時だけは賑わう。

根尾のフィールドワークでは、そこあそこで神社に遭遇することが多い。そのたびに、なぜこんなに神社があるのかと思う。人が離れた無人の集落に春や秋に、わざわざ人々が集まっておまつりをするのはなぜだろうか。シンプルな疑問だけど、根尾村史を読んでみても実のところ答えにたどりつけない。そこで、私たちは「根尾の神社をちゃんと知ろう」と思いたち、勉強会「(第7回 あんばようしよまいか)」をもつことにした。根尾の氏子総代の方や根尾の歴史に詳しい方、元村長や元校長先生などに集まっていただき、このシンプルな疑問から解きほぐしていった。

おまつりはいつする？

まつりの日は神社ごとに決まっている。いろんなおまつりが年間あるので、それに合わせて調整している。

おまつりでは何を？

集落の人たちは拝殿に座る。座る場所に決まりはないが、何となく決まっている。前の方は宮司、総代、一族、自治会長が座る。家族で参拝するので大体一杯になる。神事が終わると直会。本来、おまつりの行事だった直会だが、今は集会所で行う。米、塩、魚、お神酒の置き方や玉串の渡し方は写真をとって張ってある。それをみて覚えていく。集落ごとに雰囲気も違う。厳格なところ、和気藹々なところ、近い集落同士は似ているかもね。おまつりには皆なおしゃれしていく。フォーマルな、ちゃんとした格好。若い人はあんまりいない。参加するのは郷土愛があるからかな。ご先祖さんにバチがあたるのではないかなと思ってしまうから。

氏神さまとは？

人の集まったところには、何か頼るようなもの、信仰のようなものが欲しいという人間の心理じゃないかな。氏神とはそういった考え方。その時に集まった人によって違う。

おまいの仕方は？

根尾の神社はどれも「2礼2拍1礼」が基本。

氏子総代とは？

氏子の取りまとめ役で、今はほとんどボランティアがやっている。神社の清掃やおまつりの準備など。自分たちが決めた仕組みにそって氏子を決めている。越卒や西板谷などでは、氏子総代が世襲制の集落もある。初詣の時はお参りの人が沢山くるので、朝まで神様が盗まれないように脇でお守りするんだけど、すごく寒い。

御神体はどのような姿？

古事記にのっている將軍や神様など、神様には決まりはない。根尾の御神体は人形みたいなものや、石ころとか自然界のものを御神体にしてのりまである。昔は、ご開帳したときに下を向いていたからわからなかったし、知らなかった。見ちゃいけないって。でも今の時代は、どれどれ、と神様をみる人もいる。

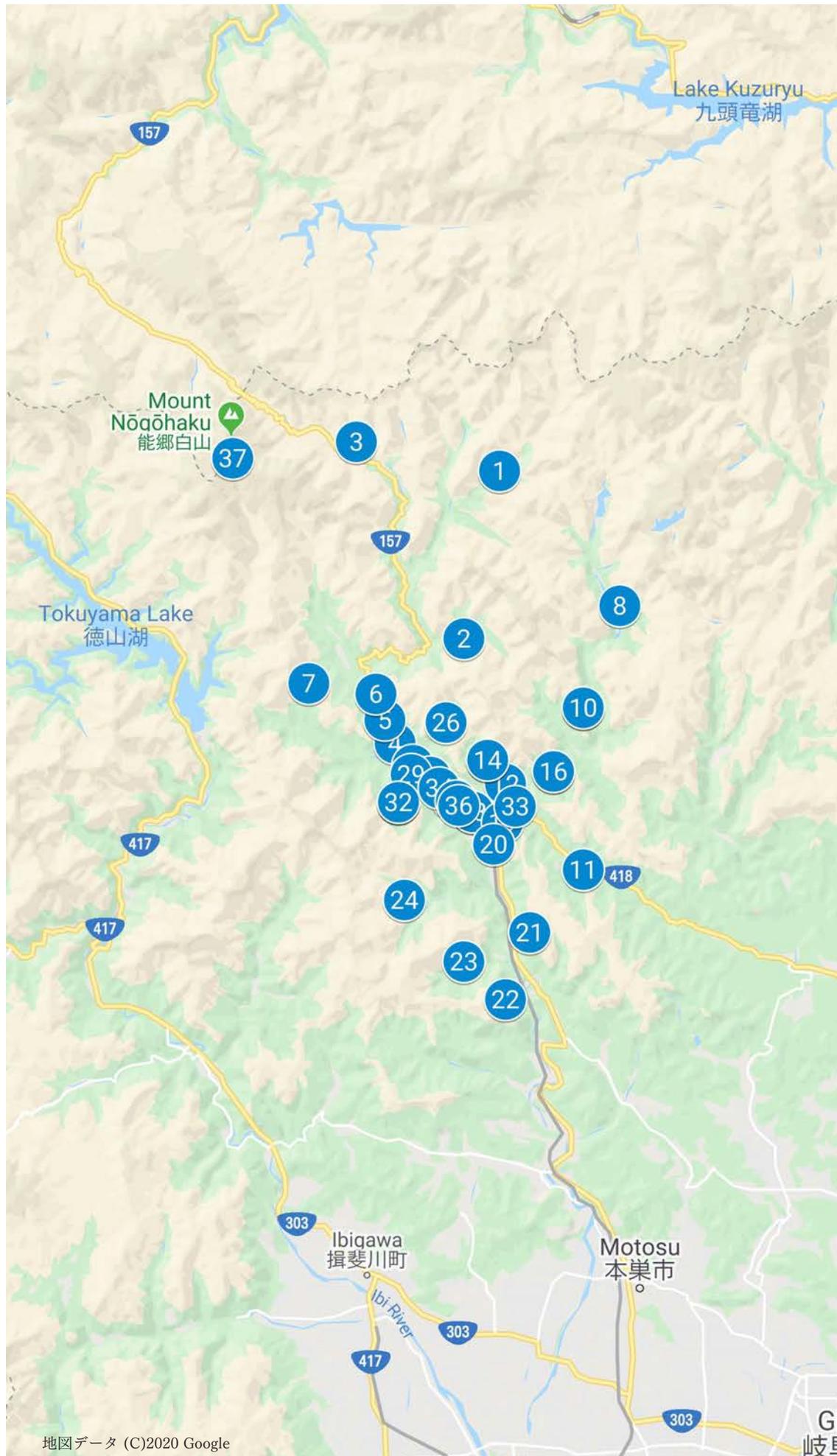
氏子とは？

氏は昔の字。今は集落の住民を氏子という。でも自治会とは違う。自治会には入っている人も入っていない人もいる（時に、うちは自治会と一緒にだよという人もいたりする）。神社は誰でもおまいりできるから、その地域に住んでいれば氏子となる。

神社の由来は？

昔は、例えば「吉田神社」のように名前(氏)が一体になっていた。吉田一族のように、元々は同族だったが、同じ地域に住んでいる人や、苗字のない人など、周りの人たちも段々含めるようになっていったんじゃないかな。大昔は、個々に豪族がいて、それぞれ御神さまをもっていた。大井集落では、7つの豪族がいて、個々に御神さまを祀ってあった。それが雪で壊れてしまい、一方で地域の人口も増えて、結果として7つを一つにまとめて、七社神社として大井集落でまとめることになった。正月になると、御神さまを開けて7体を拜むことになる。

根尾の神社地図



- 1 八幡神社 (越波)
- 2 八幡神社 (黒津)
- 3 八幡神社 (大河原)
- 4 素戔鳴神社 (長嶺)
- 5 七社神社 (天神堂)
- 6 春日神社 (長島)
- 7 白山神社 (能郷)
- 8 神明神社 (下大須)
- 9 貴船神社 (松田)
- 10 八王子神社 (松田)
- 11 山神神社 (奥谷)
- 12 七社神社 (東板屋)
- 13 雷神社 (西板屋)
- 14 若宮神社 (西板屋)
- 15 津島神社 (小鹿)
- 16 神明神社 (小鹿)
- 17 大領神社 (市場)
- 18 北野神社 (市場)
- 19 白山神社 (樽見)
- 20 白髭神社 (板所)
- 21 大社神社 (平野)
- 22 白髭神社 (宇津志)
- 23 熊野神社 (高尾)
- 24 安立神社 (水鳥)
- 25 素戔鳴神社 (門脇)
- 26 八幡神社 (門脇)
- 27 素戔鳴神社 (越卒)
- 28 姥ヶ神神社 (神所)
- 29 七社神社 (大井)
- 30 根尾神社 (大井)
- 31 大將軍神社 (大井)
- 32 四社神社 (大井)
- 33 神明神社 (口谷)
- 34 九社神社 (越卒)
- 35 八幡神社 (中)
- 36 春日神社 (神所)
- 37 白山神社 (能郷白山)

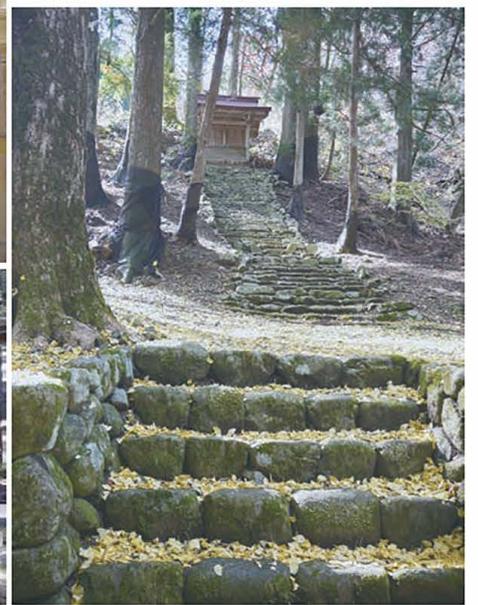
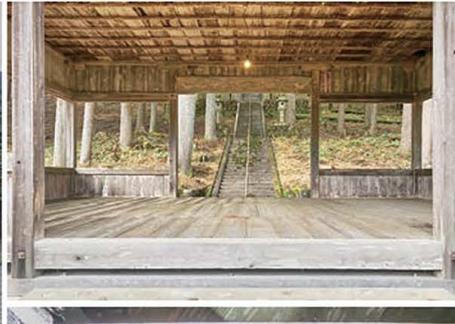
37の神社巡り

根尾の神社全部を知っている人はほとんどいない。みな自分の集落の神社や慣習については知っているが、他の集落の神社のことは意外と知らない。自分の集落の神社の行事や慣習が基準であり、集落での暮らしの一部であり、集落全てを包み込んでいる。集落を離れても、集落出身者たちが神社に集まり神事を行い続けているのは、離散しても自分たちの集落は存在している、あるいは、存在してほしいという思いからであろう。

勉強会以降、37全ての神社を巡ることにした。既に訪れたことのある神社も、勉強会のあとでは少し違って見える。自力で探すことが難しい神社もある。地図にも載っておらず、現地に案内もない。住民しか知らない道の奥に存在する神社もあった。鳥居、拝殿、狛犬、傾斜のある石段、ご神木、そして、雪囲いされた本社。本殿の脇に整然と置かれた清掃道具から手入れをしていることが感じられる。本社から集落をみる眺めは集落ごとに違って、美しい。

一年に数回そこをおまいりすることは、氏子たちにとっての儀礼的コミュニケーションであり、集落から離れて想像の共同体の氏子となった人たちにとっても、おまつりはその共同体が一時的に実体となる大事な時空間なのである。







37の神社のほかに、小さな神社にも出逢う。鳥居などではなく、木造の小さな本社だけの神社である。木に墨で書かれた文字から、近くの一族が建て祀っているのだと察せる。中を覗くと仏像が祀られている神社もある。「何をまつかは自由」と勉強会でも話されていたが、根尾にも神仏習合の名残が見受けられる。

以前、元根尾村長の所和徳氏が、根尾春日神社に祀られている祭神の一人である菅原道真について、天皇家をめぐる陰謀という歴史秘話をされたことがある（「第4回あんばようしょまいか」）。春日神社の本社脇に立つ撰末社からは、政ごとを担っていた神社の過去も読み取れる。

明治の廃仏毀釈の嵐、戦後憲法で定める宗教の自由など、神社にも政治や制度がなにがしかの関与を感じさせる時代である。しかし、根尾にとって神社は、氏子が、自分や家族、あるいは集落のことをかわらず祈る場であり、氏子同士の大事なコミュニケーションの場として今に時間をつないでいる。

秋に始めた神社巡りも冬を迎えた頃、22の神社を巡り終えた。春のおまつりまでには15を巡ろう。



蓬
02 ヒトの記憶

越波と内在的な時間

赤迫 瑠奈



街の風は合わんのや。やっぱり生まれたとこのがええ。
岐阜に行ってもやることがない。年取ると余計にね。

—旦那さんはずっと越波で？—

五郎さん：出稼ぎには行ってない。ずっと山に行って、冬はやっぱりね、何年までおったかな、昭和5、6年まではおったね。1957年まではおったね。魚をやった、アマゴの養殖。アマゴの養殖は僕が初めてやったよ。今度はみんながやるって言って岐阜の方から4、5人入ってきた。結局その人らも諦めた。魚の餌が高くなってきて経営ができなくなってさ、みんな岐阜に引っ越した。残ったのは僕だけ。結婚する前の話。

—お二人がご結婚されたのはいつ頃ですか？—

奥さん：もう40年くらい前よ、ようここへ来たと思っ
てさ。福井県から。

—旦那さんのお母さんはどんな人でしたか？—

奥さん：厳しいところもあったね。おばあちゃんは嫁入り
で19歳の時に来たんやと。もともと越波の人。

五郎さん：うちのお袋はね、立派な人やった。あのね、こ
この部落でもここのうちは名家。名家っていうかね、名主
やった。行儀からなんかしっかりやってた。立派なお袋やっ
た。朝起きても髪の毛のわさわさを見たことがなかった。
ずっとお化粧をしとった。97まで生きとった。僕がここ
に居れたのもお袋と一緒に居ったでおれた。僕の(仕事の)
手伝いもしてくれたしね。僕は色々仕事をやったの。魚だ
けやなしに、また薬草も。薬草も手伝ってくれた。そうい
うことでね、僕の手助けをしてくれた。それで出来た。い
ろんな仕事を上手にやっていた。ここではね、やっぱりみ



んな冬を心配するやろ。これはあかんということで、松田というところでも15年ばかりアマゴをやとった。アマゴは越波と松田で20年はやとった。行ったり来たりしとった。親子で朝方から夕方までやとった。越波へ来てその帰りに松田へ寄って、薬草はお袋がとってくれとった。カンノリって知っとる？道の駅のようなところへ売りに出とった。有意義な人生は送ったよ。息子もおるなら一緒にさせるのにな。息子がおらんの。

一子供さんは？

奥さん：娘がおった。悩んどったんやろ。自分からいっちゃった。

五郎さん：娘はね、名古屋の南山大学へ入った。ほいで、責任を感じすぎた。兄貴は死んだし、ほんで自分が責任を感じすぎた。学校でもね、ちょっとやっぱ頭が良すぎた。良すぎたでダメやった。自分を悲観しすぎた。やっていけるかなっていう責任を感じていた。

奥さん：気が弱いんよな、うん。もう40くらいになる

んか、生きとれば。ねえ、あんた。(娘さんの)同級生はもう結婚して子供を産んでる頃や。色々大変やったで。

奥さん：子供を産むときは産婆さんがこの部落においてここで産んだよな。軽い人は座って産んだっておばあちゃんから聞いたよ。旦那さんがとりあげたりさ。働かんならんし、子供は藁で編んだイヅミちゅうので困って置いて親はみんな山へ行とった。そうよ、どっか行とると泣いとった。泣いたら急いで帰って来て大変やった、昔はな。うちは優しそうなおばさんが(近所に)おって、その人に預けて山へ行って仕事して。見てくれた人がおって有り難かった。

五郎さん：(写真を見て)これが僕の娘。長女。チエ。

奥さん：この写真は小学校3年生の時やったか。丸顔がよく似とるやろ。小さい頃は越波のみんなに越波のサルやって呼ばれとった。隣のおじさんがブランコ作ってくれたりしとった。幼稚園連れてった時にはびっくりしとった。人が大勢おるでしょ、キョロキョロしとった。ここでは一人やで岐阜連れてくとびっくりしとった。いろいろあった

ヒトの記憶とは曖昧なものであろう。しかし、そこに正しさは必要ではないのかもしれない。越波は根尾樽見から山をひとつ超えた所に位置し、車で1時間ほどかかる。冬には積雪で危険なため、電力会社が電気を止めにくる。そのため、住民は岐阜市内にも家を持っていて冬になると皆、岐阜市内へ出るのでという。現在は岐阜の家での生活が主軸で越波へは週末に畑の世話するために帰るらしい。そんな中で週の半分以上を越波で過ごし、越波で一生を過ごしたいと繰り返し語ってくれた松葉五郎さん夫妻と出会った。五郎さん(90)は今でいう中学生の頃に一度岐阜市内に出ているがそれ以来はずっと越波で過ごしていると言う。越波の自治会長は45年ほど務めたらしい。奥さんは福井県から嫁にもらわれ、五郎さんと連れ添って40年になるという。私は彼らが何故越波で一生を過ごしたいと

思うのか不思議であった。訪れる際に彼らはよく自分たちの家族のことを話してくれた。そこから、夫妻の中に家族と過ごした経験が彼らの中でまだ生きていて、まだ彼らの家族との時間は進んでいるのではないかと感じた。

また、時間が進み続けていることによって夫妻が越波にとっての茎という役割を持つ原動力になっているのだと考えられる。彼らが語ってくれた家族のことを切り取った。また、彼らの言葉から語られる時間や情念が読み取られることを願う。

フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは私たちが普段生活している時間軸と同様に内在的な時間が存在しているという。私たちが老いを感じる時間とは別にいくつかの時間が在るというのだ。これらの時間軸はどちらか一方が何らかの作用によって想起され、もう片方の時間軸と結びつく

わ、それが人生やね。

奥さん：五郎さん、区長は何年やとったん？

五郎さん：45年間自治会長やとった。この道路も樽見の村長と話をし僕がつけたんや。それまで道はなかったから、他の部落とここをジョイントしたんや。何もかもやった。お墓も道路のすぐ脇へつくった。みんなが見るでしょ。でもね、みんな（岐阜へ）持ってたんよ。僕だけ残したのは。僕はね死んでもここ（越波の墓）に入る。みんなが通るやろ、そしたら誰かは参る。街の墓へ行ったら、狭いところへ入りたくない。みんなの墓に参る。（街のお墓は）夏はテカテカやろ、暑い。ここは涼しいやろ。ここの墓は道沿いにあるやろ、そしたら一年に一度は誰かが参る。ほんでここの墓へ入るの、ええやろ。ここにおりゃええ。冬は雪ごもりよ。雪だからあったかいやろ。

奥さん：死んだらわからへんがな。

五郎さん：高い金をかけて街に墓を立てるよりここで年に一回ほど越波に来る人に参ってもら方がええ。

みんなお墓まで持ってってしもうたけど、お墓がなげにゃ誰

もここへ来ない。家だけあるけどお墓がないから来れんね。

奥さん：隣の家も墓を持って行っちゃった。

五郎さん：あのお墓にはこの部落へ来て500年は経つとる。この部落の歴史が。500年より前に亡くなった人の歴史が火葬場に残つとる。亡くなった人を墓地の火葬場で火葬して、次の人を弔う時にスコップで綺麗にして骨もなんもいっちゃん端に山にしてよけるの。ほんでまた、次の人を焼くところを作るの。あそこ山になつとるけど、先祖の骨があるの。500年から来た越波で生まれた人があそこへ入つとるんよ、ね。みんな一緒だよ。この部落で生まれた人はみんなあそこへ入つとるの。街へ持って行くよりここへ入つとるや。ね、先祖の墓も入つとる。スコップで綺麗に山にした。あそこの丘にみんな入つとるの、ね。

奥さん：今のお地藏さんの後ろやね。山になつててでしょ。

五郎さん：個人個人の墓はあれやけど、先祖の墓はここにあるの。そのまた前の墓は、お骨はあそこにある。ほいで、うちのお袋は焼いたところに聖地場と書いてある。ここで

のではなくそれらは同時性を持っているため同じように進んでいるのだという。つまり、記憶が想起されるのではなく、何らかの事柄についての時間が今も進んでいるということなのである。これを「純粹持続」という。

純粹持続とはある事柄を意識することによって、いつでもどこでも何をしていてもある事柄に結びつくのだという。なぜ、夫妻は越波に居たいと思いつけるのか。それは、彼らの意識を持続させるものが越波には溢れていて、家族との経験を蘇らせ続けているからであろう。彼らが越波に居続けることによって彼らの中で家族と過ごした時間は鮮明に結びつき、今も進み続けている。

越波の墓地の中央には山からの水が湧き出している箇所がある。水は止まることなく溢れ出ているが水道が設置され、ヤカンも置かれている。住民たちが墓参りの際に湧き

水をヤカンに入れ、墓石を潤わせる。この湧き水が越波の根となり茎である住民を生かしている。また、そこで眠っている先祖たちも同様に越波の茎となり新芽に栄養を送っている。しかし、夫妻にとってはそこで眠っている者たちの存在は根なのかもしれない。「越波のためにできることを」住民たちがよく口にする言葉だ。越波という地に夫妻が居続け、この地で眠ろうとし、外の人たちにこの地を知ってもらおうということが彼らが越波にできることということなのだ。また、その手段は茎としての役割を十分に果たすのだと考えられる。そして越波という根から育った茎はまた根に栄養を循環しようとしている。これらは夫妻が越波で一生を過ごしたいと思う原動力にもなっているのだろう。また、この原動力によって私たちのような者が彼らに惹かれ、彼らは越波の茎となり続けるのだ。

焼いたと書いてある。聖地場とは斎場のことや。

—越波に住んでいた人の名簿のようなものは残っているんですか？—

五郎さん：名簿はない。名簿はお寺にあった。お寺がね、2回焼けて全焼しとるん。

奥さん：雪でも潰れたしね。

五郎さん：元禄2年に一回焼けとるん。その前に一回焼けとる。

—その時の記録は？—

五郎さん：何にもない。昔は寺に全部置いとったが全焼したやろ。

奥さん：燃えちゃった。

—旦那さんのお母さんもあの火葬場で？—

奥さん：火葬場は岐阜市内。

五郎さん：僕のお父さんもお母さんも岐阜で火葬はしたけ

れど、お骨は大方全部こっちへ持って来て入れた。で、余ったやつはここへ持って来て納めてある。娘もそう、長男もそう。

—全員越波のお墓へ？—

奥さん：越波がいいでな。福井の本山ね、鯖江の、あそこへもお骨を持って行ってさ。お清めしてもらって、お金はいるけどね。

五郎さん：本山は鯖江の誠照寺というお寺でね、浄土真宗の十派に入る。十派ていうと東本願寺、西本願寺、それから高田と言う浄土真宗のお寺がね、日本にある。

奥さん：いつもね、夏頃にお参りに来るで。よくこんな遠いところまで来てくれる。



茎 03 ヒトの物語

根尾の木炭で絵を描くということ

亀田 茂

場所というものは、常に距離を持つ。

いざ岐阜の地に住まうとなると、やれどの都市の催しに向かうにも、やれ誰をここへ招くにも、そこには場所の問題が生じる。出身は東京で、そこは確かに多くの文化を引き寄せる。よりどりみどり、消費には困らない。自己完結したパノラマのビューは、まるでハリボテだ。

私は、岐阜の地でハリボテを見たことがない。ここ根尾村には、確かな文化がある。誰も見栄をはることなく、誰に頼まれるわけでもなく、村人は細々と文化を守り続けている。文化が根を張るのは、常に場所なのだ。だって、場所は簡単には越えられないのだから。

そんな“場所”に繰り広げられる、人々の物語とはなんだろうか。

私はこの学校へ来て、教授にモースの贈与論を勧められた。生活と行動の本来の契機を知るには、社会的現実について鋭い感覚を持つこと。すると、その場所には社会的規範が存在し、それは交換の体系によって形作られていることが分かってくる。このような原始的な体系を読み解く時こそ、我々は魂が行き交う様を目の当たりにする。そこには血が通っている。物語はその血を持つのだ。だから物語は呼吸をする。

最初に、根尾の炭焼の系譜を知った時、私は久々に木炭画を描きたいと思った。

画材は思考通りに使いこなせないからこそ、絵を描く事に驚きがある。私は木炭画の色味が本当に好きで、木炭による繊細でありながら無骨な表現が、いつも私の心を洗う。お会いした松葉さんに木炭を差し出される。木炭との戯れ。メディアは記憶装置である事は抗いようのない事実で、例え画材用とは種類は違えど、木炭を触ると描画の最中の驚きを思い起こしてくれる。

松葉さんと話をする。実際の山の生活は厳しい。旧根尾村は明治維新以降に道路が整備され始めると、各地方で炭焼が行われるようになった。

松葉さんは、昭和の最後まで炭焼きで収入を得ていたそうだが、今では農業が本業だそうだ。それでも淡墨地区では、名の知れた炭焼職人であった。私は松葉さんに倉庫まで誘われて、当時の百姓が担いでいた炭俵を実際に持ち上げる。腰にずっしりとくる。どれだけ私はインターネットの世界に生きていたのだろう、本当の情報というものはいくらも重さを持つものだとは私は目が覚める。百姓としての本当の生活。それは情報化しようと思えば様々なビットがロスしてしまう。本当の情報とは質量を持つのだ。



私は松葉さんに、ヤナギの木で木炭を作れないかと依頼する。そんなのはお遊びだ、と松葉さんは一蹴する。ヤナギの木炭なんか収入にはならないそうだ。絵画の世界では、ヤナギの木炭は描画画材としては最適である。ただ単に、松葉さんが炭焼きをされていらっしやった頃は、根尾では誰もヤナギで木炭を作ろうとは思っていなかったという話だ。そこで私は、昔描いた木炭画の写メを松葉さんに見せる。そして私は、松葉さんの炭で松葉さんを描くと約束する。松葉さんからは「木炭の作り方を教えるから、ヤナギの木を自分で見つけてこい」と言われる。彼としても、都会もんの言うことをきくのは面白くなかったのかもしれない。だが私は交換の体系に身を投じることで、この生きる物語に食われてみたいと思ったのである。松葉さんも、信じるならば私の絵の実力よりも、それは交換の体系の方だろう。それは話していれば分かる。

樽見地方の川沿いを歩く。ヤナギは、きっと川沿いにあるだろう。そこで私は年配の婦人と出会う。その方は乾さんという。乾さんは、川沿いにもっこりと生い茂る緑を指差す。「あれがヤナギです」と乾さんは言う。なんの変哲もないネコヤナギである。道路から川沿いの方まで歩くのに怪我をしないようにと、私は乾さんの自宅から長靴まで

お借りしてしまう。枝の回収はそこまで大変ではなかった。松葉さんと協力して焼いた、出来たてほやほやの炭を見せようと、私は乾さんの自宅を訪問する。長靴を借りた時に自宅へ伺ったから、住いは知っていた。そこで思わぬ形で、私は乾さんと意気投合する。乾さんは公開講座の期間中、根尾公民館の絵手紙教室へ通っているとのことで、実は絵を描かれるのに大変熱心な方であったのだ。自宅には、過去に名古屋市内の展覧会へ通い、気に入った画集の山がある。もしかしたら私なんかよりも、名画について詳しいかもしれない。

乾さんからは「絵を教えてみないか」と提案される。自分も木炭画に挑戦してみたい、とのことだ。そこからは公民館とのやりとりも生まれ、絵画教室の準備が始まっていく。

当日のお題は「思い出の風景」にする。私は参加者の昔のことが知りたかったのだ。自らが歩んだ歴史を、思ったような形でなくてもよいから絵にしてみることに。描くことで、今まで記憶として意識していなかった事が見えてくる時がある。自らが感じていたことを、視覚的に見えるようにして、新たな視点でそれを眺める。それが物としてある。物としてあれば、そこから交換の体系が生じてくる。絵はその体系を編み出していく力を持つ。



カラヴァッジョ、デューラー、フェルメール。国内の展示会で海外の名画を鑑賞するためには、期限付き貸与にしてもそれは物から生じる交換の体系がそれを可能としている。単純に名画の来日を喜ぶものとして、その事をイベントとして消費するわけではない。名画は、その“場所”の歴史を一身に背負う。その場所、時代に存在した人々の眼差し。それらも卓越した技術で表現されているが、絵は描かれる以上に、その土地の空気をまとう。ムンクに至っては、晩年はアトリエの外で絵を描いていて、作品は風や雨を受けようとそのまま野外に放置していた。それらは名画達の魂の姿である。その場所の物の貸与のやりとりに、我々はやはりアルカイックな体系を背後に見るのだ。それにより我々は、豊かな文化を享受する。そのような新たな物語の始め方が、根尾にも根づかないかと考えた。そこには、その土地の木炭が使われる。参加者が描く絵は、根尾の絵であって、根尾の物なのである。そしてまた根尾の物語が、根尾の物を中心に展開される。

「難しかったです、とても楽しかったです。」

乾さんは笑顔で言う。乾さんは講座中は終始、制作に集中されていたが、それと同時に他の参加者との交流を活発にされていた。彼女は昔、登山仲間と唐松岳へ登ったそう

だが、今回はその際の写真を持参した。乾さんは木炭を使い、見事な山肌を描く。その大きさ、繊細さ。人は皆、誰もが画家の眼を持つのだ。ただ人は滅多に絵を描かない。乾さんは絵を描いた。故に乾さんは画家になったのである。今回は幸運な事に、絵手紙教室の生徒の方々にご参加いただいた。私の突発的なアイデアに賛同していただいたことを、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

一方で、私も絵を描かないといけない。松葉さんとその約束をしたからだ。この絵を通じて、炭焼職人の系譜を継ぐ松葉さんの人柄もちろんそうだが、私は根尾の豊かな光の移ろいを表現したかった。根尾特有の光による、独自の物の見え方。綿毛のような空気感。限界集落を想像する時、社会問題と紐付けるから重いイメージを感じるが、根尾は実に軽やかな場所なのだ。人も山肌も、畑も、それを荒らす害獣も、虫も倒れた木々も、そして子どもたちも、みんな自由気ままに振る舞う。元絵となる松葉さんの写真も、その時はご自宅のベランダで撮影した。

絵をお渡しすると、松葉さんは恥ずかしがっていたのか、いつもより口数が少なかったように感じる。物語を語るのに、人は言葉を多く必要としない。物が、その交換の歴史を綴る。物語を伝承するにあたって、絵は誠に雄弁なのだ。

菌 01 盆踊り

時空間を超えていく根尾の踏み踊り

金山 智子・小林 孝浩



根尾の盆踊り

提灯が灯された拝殿に上がり下駄で床を踏む。床踏音に調子を合わせ、掛け唄をのせて踊るのが根尾の盆踊り。

根尾の盆踊りは、踊り手の掛け唄とシンクロさせながら踊り続けることで成立する。それぞれの唄にはたくさんの節がある。例えば、最も馴染みのある『さんより』は46節ある。皆がそれぞれ覚えている節を唄い続けるかぎり、踊りは続く。

数曲踊ると、狭い拝殿内は踊り手の汗と吐息が混じりあった白い熱気が充満する。タッタタン、タッタタンと下駄で床を蹴るリズムが響く空間にいと、ある種トランス状態が発生しているように感じられる。踊り手達は、時々、輪から外れ、拝殿を降り、神社境内の研ぎ澄まされた空気と身体で熱気を解き放つ。拝殿の賑わいと神社の静寂を往き来しながら、踊りは夜遅くまで続いていく。



東京の若者たちと盆踊りの稽古

大井と長嶺の根尾の盆踊りに初めて参加した時、下駄で床を蹴る三拍子の複雑な踏み踊りについていくのはとても難しかった。その場には、都会的な若者が5人から6人いた。iPhoneで歌詞を見ながら唄っている。若者たちは各地の盆踊りを勉強する東京のグループ（うたわの会）で、郡上おどりや白鳥おどりなど、岐阜の盆踊りに参加しているうちに、偶然、根尾の盆踊りを知り「ハマった」と言う。ビデオ撮影したフッテージを教材にして歌や踊りを練習したらしい。掛け唄を唄えない地元の若者が多くなる中、彼らの存在は頼もしい。掛け唄が終わりそうになると、彼らが唄い、踊りの流れを途切らせないようにする。地元の人たちも喜び、一緒に、この一期一会の盆踊り空間を盛り上げていた。





この体験の後、「私たちにも踊りを教えて欲しい」と、根尾盆踊り保存会会長の吉田喜作さんに頼んだ。その後、吉田さんは大怪我をし、復帰まで1年近くの歳月が過ぎた。回復を待って、2019年7月に保存会メンバーの皆さんから踊りを教わる機会をつくってもらった。保存会メンバーは70代から80代の女性達が中心だが、足が痛いなどと言いながらも、踊りが始まると、水を得た魚のように、凛として「ス〜っと」踊り始める。複雑な踏み踊りも、流れるように美しい。優美なワルツのようだ。

会の終盤、一人の若者がその場に入ってきた。明らかに「よそ者」と感じられる存在だが、保存会メンバーは親しげに話していた。唄も踊りも完璧なこの若者はメンバーが頼るほど。実は東京人だそうで、旧徳山村の盆踊りに参加した帰りに根尾に寄ったと話していた。

根尾の人たちの聴き語り

根尾

あんばよう しよまいか

第六回「根尾の盆踊りを体験しよう」

踊り手：吉田喜作さん
語り手：根尾盆踊り保存会のみなさん

2019年7月21日(日)
13:30 - 16:30
場所：根尾中学校体育館

参加費・申し込み不要

主催：IAMAS 根尾コ・クリエイション

※中学校駐車場に駐車可



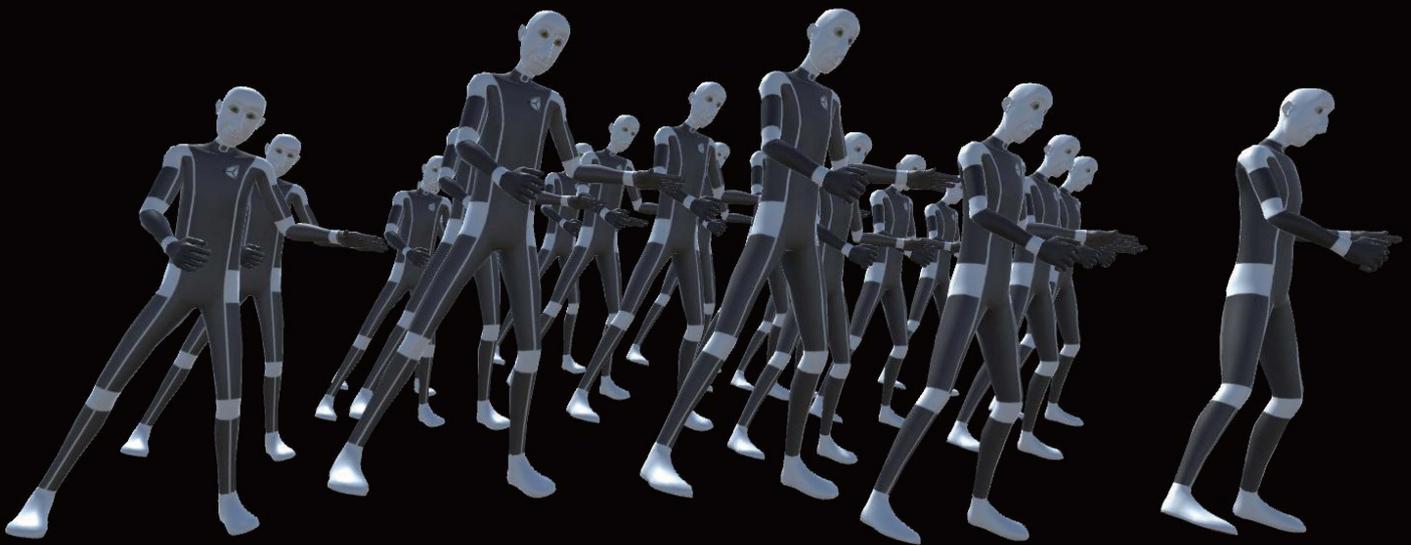
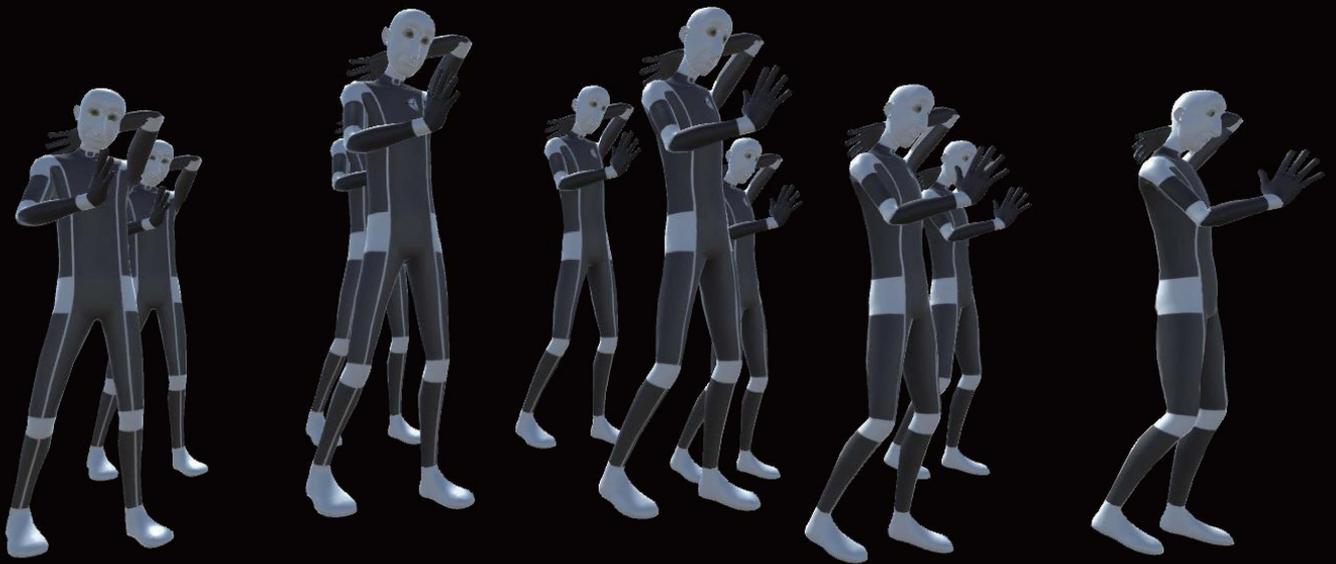
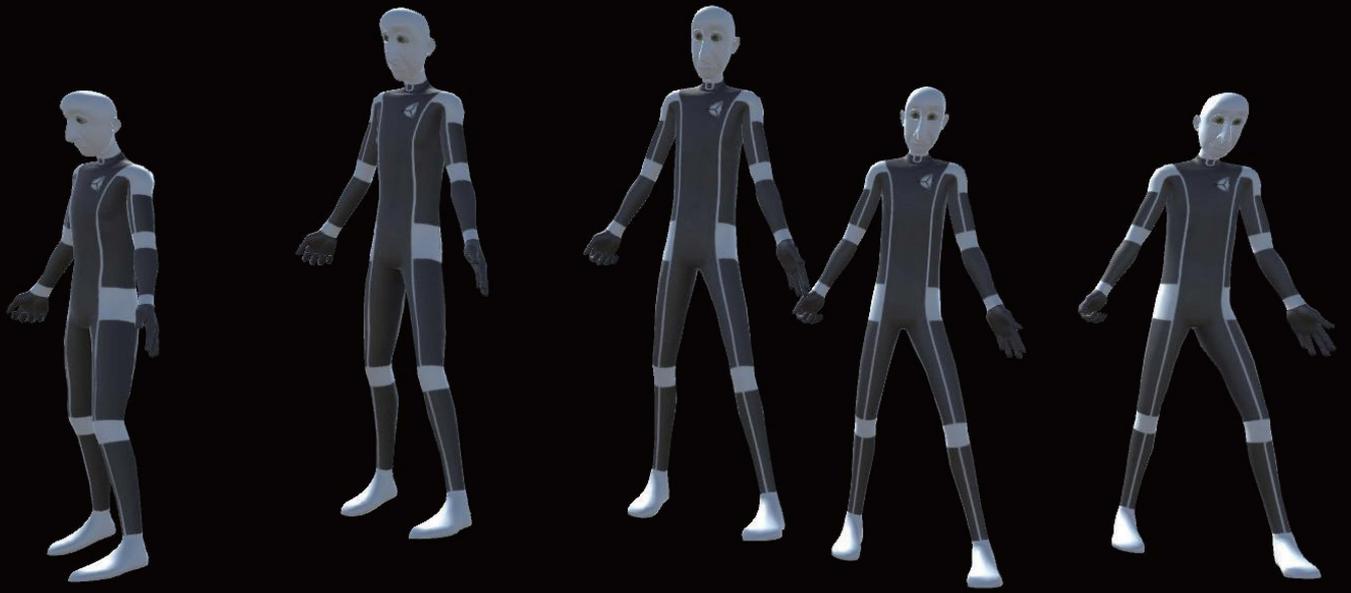
今回、根尾の盆踊りを覚えたい人のために、ビデオとは異なる方法で踊り手の動きをアーカイブ化することを試みた。保存会メンバーの協力を得て、まず、その踊りを記録していった。記録された盆踊りに、保存会メンバーたちは興味津々で、東京からのメンバーたちにも好評だった。複雑な踊りを覚えるにあたり、新しいアーカイブを開発し役立てることについて、今後、東京メンバーの協力も得られそうだ。



Bone Odori メディア技術を活用したアーカイブ



盆踊りのアーカイブ（記録）は、映像や歌詞、挿絵によって行われることが一般的である。近年、一般に入手しやすくなったメディア技術を使用することで、対象を立体的に、かつ、連続した動画として記録することができる。本手法を活用することで、踊り手の様子を自由な向きから見回すことなどが可能となる。また、踊り手の「骨格」を画像から推定し、表示することも可能であり、腕の角度や体幹の微妙な動きなどをわかりやすく伝えることなども実現できる。これまでに、盆踊りの練習に参加し、これら技術の検証を行っている。



人をつなぐ場としての盆踊り

根尾村史によれば、根尾の盆踊りの始まりには諸説がある。今から1400年以上も前、継体天皇が都に向けて出立するのを名残惜しんだ村人たちが踊ったことが始まりとする説。旧盆に先祖の精霊を迎えなぐさめる行事として踊られ始めたとする説。盆踊りに関しては記録がなく、人伝での口承により諸説が存在するようになったのであろう。

終戦後、すたれかけていた盆踊りは保存会などの力で復活したが、ラジオやテレビの普及により下火になった。最近、若者たちの盆踊りブームや文化遺産としての見直しから盆踊りをまちづくりに活用する地域が増えている。時代

の変遷を経て、現在、集落の拝殿で盆踊りを行うのは、大井、門脇、長嶺の三集落のみとなった。一方、樽見駅前に櫓を立てその周りを踊る盆踊りを、花火大会や神輿まつりなどと統合した夏のイベントが毎年開催されるようになった。

では、現在の根尾の人たちは、根尾の盆踊りをどのように語るのだろうか。若い頃、盆踊りに参加していた、現在70代や80代の人たちに、根尾の盆踊りについて尋ねると、男女問わず「社交の場」あるいは「男女の出会いの場」と答えた。男性も女性も、自転車などで各集落の盆踊りを廻ったそうだ。いわゆる「盆踊りのはしご」で、山や谷や

川など平気だったと言う。「女性が多いと聞くとそこに行った」と保存会会長の吉田喜作さんは笑いながら語っていた。盆踊り練習の休憩中、「踊りを見初められて結婚したのよ」と話す婦人がいた。その言葉から、昔の盆踊りは、現代のクラブやひと昔前のディスコのような場であったことを想像した。大きく違うのは、神様にお参りしてから踊ったことかもしれない。

2019年1月、『ダムに沈んだ盆踊り、都会の若者が継承旧村民の目に涙』というニュースが全国紙に掲載された。同年夏、根尾に参加していた東京グループが中心となり、

十数年ぶりに徳山踊りが復活した。彼らの存在と活動は、旧徳山村と旧根尾村の盆踊り保存会の人たち同士との交流にもつながった。

はるか昔、大切な人への想いを表すために発明された根尾の盆踊りは、やがて男女の出会いの場となり、異なる世代を継ぐ場となり、そして、地元の人たちとよそ者たちを繋ぐ場へと、時代の移り変わりに対応しながら、消えることなく、舞い続けられている。



大須集落の盆踊り

大須集落の盆踊りは祖霊を供養するための踊りである。福寿寺の庭で踊る踊りは、輪になって踊るものや太鼓や鉦を叩き、ちんちきを振り回すなど、他の盆踊りとは全く異なる。踊りが終わると、住職を先頭にして、たくさんの提灯を提げて、川まで精霊を送る。

菌 能・狂言

発見された伝統文化の小さな革新

金山 智子

(稽古は) 昔は正月の六日の晩からやったって言うんですわな。
今はそんなことはやらず、四月になると始めます。
そんなことではあかんから、せめて三月の十日ごろから始めてくれ
言うんじゃけど、きょう日はお互いに世の中が世の中でしょ。
十六人から寄ると、さしつかえばかり出て来て、練習もあんまり
できんので、みぐるしてかなわんけど、しょうがございませぬわな。¹⁾

「発見」された能郷の能・狂言



能郷は四方を千メートル級の山々に囲まれ、集落の中央に氏神白山神社が鎮座する。717年に泰澄法師が開基したと伝えられる奥の院は、福井県境の能郷白山頂上(1617m)にある。能郷の能・狂言は、白山神社の祭礼として能郷地区(旧能郷村)の16戸の猿楽衆とよばれる氏子により奉納される神事芸能であり、毎年4月13日に行われる。能方・狂言方・囃子方という役割が世襲的に口伝で受け継がれてきた。僅かに残された史料や室町期の能面の作製時期から、500～600年の歴史があるとされており、今の能の流派が固定する以前の猿楽を源流としている。

明治以降衰退し、戦後途絶えていた能郷の能・狂言は、1955年に京都大学の猪熊兼繁教授に発見され、1958年に岐阜県から無形文化財に指定された。これまで能郷集落でひっそり執り行われてきた神事芸能は突然脚光を浴び、復活したのである。1960年代には保存会結成や保護体制が整備され、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定された。



世襲制度から「地域つながり」へ

外部からの評価により、かつて「集落内での神事」であった能・狂言は「残すべき文化財」へと変わっていった。一方、少子高齢化や若者流出の加速により高齢者の単身世帯型の限界集落となり、文化財の継承は厳しくなった。村内で継承問題が議論される前に文化財指定による継承義務が先行し、継承問題の根本的解決が図られないまま、多くの問題が未解決となったと福田は指摘している。¹⁾

1970年代後半から、完全な世襲制が困難となり、当時能郷地区45戸の全てに門戸が拡大されたが、長い時代、厳格に世襲制度を守り、それが地区において一つの格式あるいは猿楽衆という特別な存在や力をもっていったことから、そこから排除されてきた地区の人たちの中には複雑な想いもあり、「全戸をあげて協力する」という意識や機運にはなりにくかった。

2000年には、初めて能郷地区外の住民や岐阜市など近隣在住の能郷出身者も会員として受け入れ、継保存存を図っていった。当時の根尾村長から声を掛けられた若手職員3名が会員となった。彼らは大井、板所、長島集落の住民だが、「根尾の居住者」で「役場の人」という点でみな納得したという。2001年米国ワシントンDCで開催されたワシントン桜祭りでは、岐阜県として参加、そこで能郷の能・狂言公演を行なったが、彼らもそこに参加した。その後、その3名の内2名が仕事との両立の難しさを理由に辞めた。保存会の人たちは期待が大きかった反面、慣習に捉われない制度の導入に対してネガティブな印象をもった。一方、残った役場職員に対しては「続けてくれる人」として、以後保存会が求めるモデル的人物となった。

2010年頃、能郷白山神社の神主と若手神主に声が掛かった。それは、「能郷や根尾の神主」という理由であった。神主の一人は「狂言が面白そうだから参加した。10年続

けるとは思わなかった」と話していたが、両者とも現在も続けている。2018年には、本巣市地域おこし協力隊の一人に声が掛かった。「根尾の地域おこし協力隊で、みんな知っているし、楽器もできる」のが理由であった。

外部に門戸を開きながら、「隣の集落」「祭りが同じ日」など、自分たちと何かつながりがあることを拠り所に受け入れているようにみえる。能郷地区全戸に門戸を開いた際には、「能郷とのつながり」が、能郷地区外に拡張していった際には、「根尾の人が知っている」「根尾の子だから」など「根尾とのつながり」が重視されていった。

こういった地域のつながりへのこだわりは、一方で世襲制とは異なる参加者間の差異を生む。これまでの「世襲する人」「しない人」という地区内での差異ではなく、「猿楽衆」「能郷地区住民」「能郷出身者」「根尾関係者」といった保存会内部での異なる層である。これらの参加者間の違いは、保存会での意見や発言となって現れてくる。能郷地区外からのある参加者は、「能郷の人が主になるように、自分が前にでることは控えている」と話しており、「能郷の人である」ことが最も重要であることはあまり変わってはいないのかもしれない。

猿楽衆の人たちは、神事芸能としての継続、長く継続できる人への参加、つながりの維持を望む。一方、能郷地区外に住む能郷出身者や根尾関係者は、つながりの希薄化よりも、やりたい人がやっつけける仕組み、演目の削減、他の文化財との差別化、中学生など子どもへの伝承と、継続のために新たな取組みが必要であると考えている。猿楽衆とその他の人たちの意見や感情的な差異は、今後伝承をどのようにしていくのかの議論へと展開させていくことの障害にもなっている。

生活スタイルの変容と神事芸能の型化



能郷の能・狂言は4月13日の奉納神事の準備として、3月に演目や練習方法を決める「きりこみ」（会合）を全会員が集まって行ない、連夜練習を経て本番を迎える。神事後には反省会を行なう。これまで踏襲したやり方も、生活スタイルの変化や能郷区外の参加者の増加によって変化している。例えば、「きりこみ」は現在も実施されているが、奉納終了後の反省会はなくなった。

能郷の能は、舞に謡や囃子を合わせる。ゆえに、稽古でいかに合わせていくかが不可欠だが、夜の練習に全員が揃うことは現状難しい。実際、本番前日ようやく全員が揃って稽古できたこともあったという。能の能・狂言は男性のみが演ずる芸能であり、仕事に従事している参加者にとっては、数週間とはいえ稽古は負担となる。特に根尾地区外の会員は夜7時からの稽古に出ることは楽ではない。

かつては、猿楽衆の各家で稽古が行われた。稽古はかなり厳しいものであったと、父親が家で指導していたことを記憶する住民は語っていた。厳しい稽古ゆえ、「しっかり覚え忘れない芸」となった。芸は、他人の芸を見て覚えるものであったが、現在は保存会が作った本を見ながら覚えていく。能郷地区外からの参加者たちは、通勤や移動の車中でカセットテープを使って練習し、家ではビデオテープを見ながら練習したと話す。したがって、芸を「しっかり覚える」までいかず、「とりあえず覚える」ことが目標となる。このような現状で、能・狂言を「まねごと」と表現する者もいた。かつては、扇子をもった手の形が異なる意味を表現するほど、細かな芸であるが、現在は一つの型として覚えるのが精一杯なのである。

会員減少に伴い、これまでならば現役を引退して指導役を担っていた年の会員たちも、80歳過ぎても引退できず、役者と指導者を兼任せざるをえない。「自分たちの前の代なら指導しているのに、自分はまだ現役で、自分でも思うようにできないのに」という会員もいる。長年演じていても、高齢になり不安になるのは当然である。現在、神事芸能は観客の前で行うため、「失敗は村の人ばかり

だったら大爆笑だった。今は観光客が主だから失敗が怖くなった」と話すものや、客の入り気がなくなって見に行くという集落の女性もいた。外部評価や芸能保存目的で、様々な地域で公演依頼されるようになったが、イベント化された神事芸能にも練習は必要であり、芸能としての公演は演者のプレッシャーをさらに高める。



続けるだけでは残せない時代に地域伝統文化をどう継承していくのか。変えていかなければ守れないという人もいる。しかし、今の能郷の能・狂言を600年前の人たちが見たらその変容ぶりに驚くだろう。同時に、今もそこで続いていることに感動するかもしれない。それは、紆余曲折がありながらも、能郷の能・狂言が小さな革新を続けてきたことの証であり、その営み自体が伝統文化なのである。

2019年初秋、保存会会長から、「能・狂言の衣装干しをするけど見にくるか」と連絡があった。能郷白山神社の拜殿で、能・狂言の衣装や囃子方の座布団などが干されていく。「いつも夏の終わりから秋にやる」この小さな作業も、長い間猿楽衆で繰り返されてきた慣習であろう。外部の人がこの小さな慣習に興味をもつかもしいと声がけされたことも、小さな革新となるかもしれない。





ⁱ井上房子 (1971). <聞き書き> 能郷猿楽
—松葉庄五郎翁に聞く— . 芸文 1: 13-24.

ⁱⁱ福田裕美 (2003). 文化財政策における民俗芸能の継承にかかわる課題についての研究—「大江の幸若舞」「水海の田楽能舞」「能郷の能・狂言」を事例として—. 文化経済学 4(1): 19-30.



本稿は地域活性学会第11回研究大会での発表論文「コミュニティ・レジリエンスからみる地域の伝統文化の継承：旧根尾村を事例として」(2019年9月)を元に書き直したものである。

お世話になった皆さん

石川茂和	三本木隆	原田ゆかり
一柳みや子	高橋保直	伏田昌弘
伊藤翔太	田中信子	洞口豊美
伊藤悠介	寺田弘子	松葉五郎夫妻
乾由美子	所 和徳	松葉三郎
奥村喜和	所 孝一	松葉修治
金子典栄	所 愿	宮脇俊治
川口泰平	中野徳和	吉田喜作
川口康夫	羽田すみ子	吉田雄樹
黒川光子	葉名尻義一	
小久保学	葉名尻紀子	

(五十音順)

お世話になった組織・団体

うたのわ会
お食事・喫茶たなか
根尾小学校
根尾文化センター（本巢市教育委員会・根尾公民館）
根尾盆踊り保存会
能郷の能・狂言保存会
本巢市地域おこし協力隊
本巢市役所 根尾分庁舎
(五十音順)

参考文献

- 伊藤幹治 2011.『贈答の日本文化』筑摩選書
イリイチ, I. 1989.『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディタースクール出版部
イリイチ, I. 1999.『生きる思想—反=教育/技術/生命』藤原書店
コーン, E. 2016.『森は考える』亜紀書房
清水博・久米是志・三輪敬之・三宅美博 2000.『場と共創』NTT 出版
田中 直 2012.『適正技術と代替社会—インドネシアでの実践から』岩波新書
奈良由美子・稲村哲也 2018.『レジリエンスの諸相—人類史的視点からの挑戦』
根尾村 1980.『根尾村史』
根尾村 1980.『根尾村史 民俗史料編 (一)』
根尾村 1980.『根尾村史 民俗史料編 (二)』
根尾盆踊り保存会 1998.『根尾盆踊り唄』岐阜県本巢郡根尾村
ベイトソン, G 2000.『精神の生態学』新思索社
ベルクソン, H. 2009.『時間と自由』白泉社
モース, M. 2014.『贈与論』岩波書店
レヴィ=ストロース, C. 2010.『野生の思考』みすず書房
Wohlleben, P. 2016. *The Hidden Life of Trees*. Vanvouver: Graystone Books
日本ポリエチレンパイプシステム協会 2019.『ポリエチレン管の耐候性評価』



根尾コ・クリエイション

IAMAS メンバー

金山 智子

小林 孝浩

吉田 茂樹

鈴木 宣也

亀田 茂

赤迫 瑠奈

平塚 弥生

発行日

2020.02.22

発行

根尾コ・クリエイション

表紙絵

亀田 茂

デザイン

山口 伊生人



ねおこ

11111